

## 地域貢献報告書

## 能舞台活用・伝統芸能による地域活性化に関する調査研究 - II 集落活性化調査研究 - 農・能イベント持続的発展のための協働と情報拡散 -

Study on regional revitalization through enhanced utilization of Noh stage and traditional performing arts -collaboration on sustainable development of agriculture and Noh, and information dissemination-

藤田 晴啓, 岡崎 一也  
Fujita Haruhiro, Okazaki Kazuya

### 1 はじめに

新潟国際情報大学藤田晴啓ゼミナールは2012年以来、佐渡市羽茂小泊集落との交流活動を続けてきた。毎年秋、3年ゼミナール生全員が小泊集落の村社である白山神社奉納能の行事に参加するとともに、住民の集落活性化に関する意識調査を実施してきた。本報告の前半は、「経営情報学部紀要第3号（2020）」にて報告した、2013年に実施した活性化に関する意識調査を引き継ぐ形で、2019年10月15日に集落全戸に実施した、能、能舞台の活用、活性化に関する意識調査の結果である。2020年、学生が主体となる調査事業を進展させ、令和2年度佐渡市「域学連携地域づくり応援事業」の「集落活性化調査研究 - 農・能イベント持続的発展のための協働と情報拡散 -」を受託した。本稿後半は同受託研究により2020年10月24日から26日にかけて小泊集落にて実施したワークショップ等の活動報告である。本号「経営情報学部紀要第4号」（2021）から「地域貢献報告書」の категориを新設したので、この場を借りて報告する。

### 2 能・能舞台および地域の自慢に関する意識調査（2019年）

#### 2-1 家族構成の変化

小泊集落家族構成（59世帯延人数, 2019年）

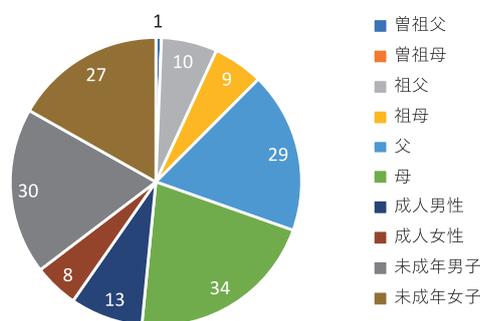


図1 家族構成員毎の延べ人数（59世帯、2019年）

小泊集落家族構成（40世帯延人数, 2013年）

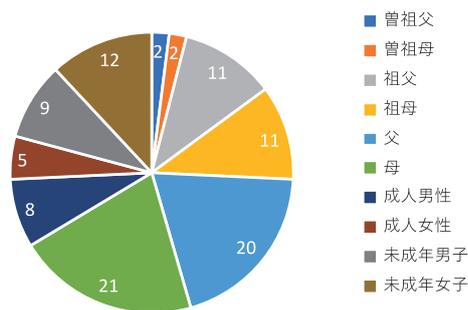


図2 家族構成員毎の延べ人数（40世帯、2013年）

調査票配布日：2019年10月15日

配布対象：佐渡市羽茂小泊全世帯80戸

有効回答世帯数：59

図1は回収された調査票のうち有効回答であった59世帯合計161名に占める家族構成員毎の述べ人数を円グラフで表したものである。図1と対比し、年次変化を見るため、2013年に調査した集落40世帯合計101名の円グラフを図2に示した。円グラフのそれぞれの数値は延人数である。

2013年の調査では回答世帯40戸の世帯当たりの平均家族人数は2.53人であったのに対し、2019年の調査では世帯当たり2.73人と若干増加している。

この集落全体の累計家族構成人数にかかる比率では曾祖父母が0.6%（2013年は4%）、祖父母が13.7%（同21.8%）、父母が39.1%（同40.1%）、成人男女が13.0%（同12.9%）、未成年男女は35.4%（同20.8%）であった。

2013年の調査と比較すると顕著な人口構成比の変化が曾祖父母、祖父母、未成年男女にみられ、父母及び成人男女の比率に変化は見られない。祖父母の構成比率が $\frac{1}{3}$ に減少した反面、未成年男女の比率は1.7倍と大きく増加した。6年間で未成年男女の人口比率が増えたのと同時に高齢者人口比率が減少したことが明らかとなった。

## 2-2 能舞台を能以外の目的で使用するこへの希望

2013年の同じ質問への回答では「希望する」が42%、「希望しない」が58%で希望しないが上回っていた。2019年の調査では無回答も選択肢に入れたので、直接比較はできないが、無回答を「どちらでもない」の選択とすると、「希望する」が18%、「希望しない」が51%となり「希望しない」が「希望する」を大きく上まわった（図3）。2013年および2019年の調査を比較すると、「希望しない」意見が増えたことは明確である。考えられる要因として2012年に能舞台屋根修復後の柿落とし能公演とともにギターや「しの笛」等の楽器とともにアンプ・スピーカー等を使用したコンサートが開催されたので、その記憶が「希望する」数に影響を与えたと考えられる。2012年以降能以外で能舞台が使用される機会はなかったので、「希望しない」が増えたものと推測される。

能舞台を能以外の目的で使用したいか？

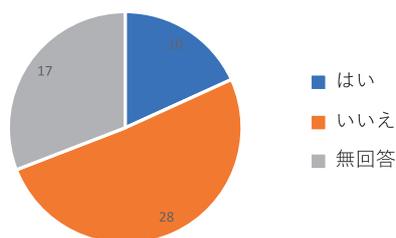


図3 能舞台を能以外の目的で使用する希望

### 2-3 能または能舞台の積極的利用による集落活性への意識

2013年調査では同じ質問はしておらず、「伝統芸能で村の活性化は可能か否か」の質問であった。2013年の質問への回答は55%が「活性化可能」と回答した。2019年の質問は能あるいは能舞台による集落活性化に質問を絞っており、「能または能舞台積極利用で集落は活性する」と肯定的な意見は無回答を含めた全体の52%であり、集落としては能または能舞台を集落活性につなげている意識は半分程度ある（図4）。質問内容は同じではないが、同様の傾向がみられる。

能または能舞台の積極的利用で集落は活性するか？

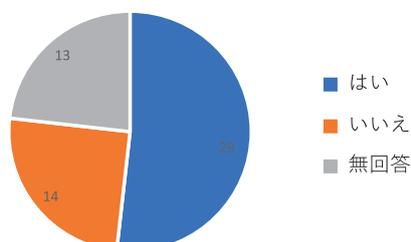


図4 能または能舞台の積極利用による集落活性への意識

また、どのようなやり方で能または能舞台による集落活性化が可能となるかへの自由記述では、駐車場を増やす、時期を決めて定期的に開催する（2）、地域全体あるいは一緒に活動する（2）（現在の演能実施は小泊集落単独のもの）、観劇者や回数を増やす、もっと公演の周知を徹底するといった意見があった。

能または能舞台の積極的利用で集落は活性しないを選択した個別理由としては、観劇者の地域が限定される（実際のところ集落外の観劇者はほとんどいない）、能舞台の維持が困難・金銭がかかる（2）、集落のみだと活性化は厳しい、（能舞台での演能は）活性化に繋がるとは思わないという意見があった。

## 2-4 能イベント学生参加に対する意見

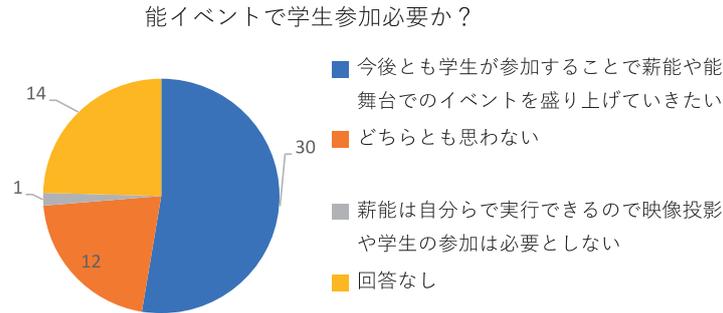


図5 能イベントの学生参加に対する必要性

図5は今後とも薪能や映像投影で学生参加が必要かどうかに対する回答である。全体の53%が今後も引き続き学生参加を望んでいる。一方「どちらとも思わない」と回答した世帯は全体の21%、回答なしの25%と併せ、全体の46%が判断を留保する結果となった。1世帯は薪能は集落で実行できるので映像投影や学生の参加は必要としないと回答があった。学生が協力できる活動としては、農作業の手伝い・体験（7）、道路整備（2）、環境整備（ゴミ拾い、花壇整備、川清掃）（2）、興味を持たせる運動、高齢者の手伝い、小泊祭りに参加、地元の料理で食事会という提案があった。農作業の手伝い・体験が多かったのは、薪能という神事ではなく、自分らの普段の活動をもっとよくみて欲しいという希望の表現ではないかと考えられる。

## 2-5 集落の農産物と能舞台への誇り

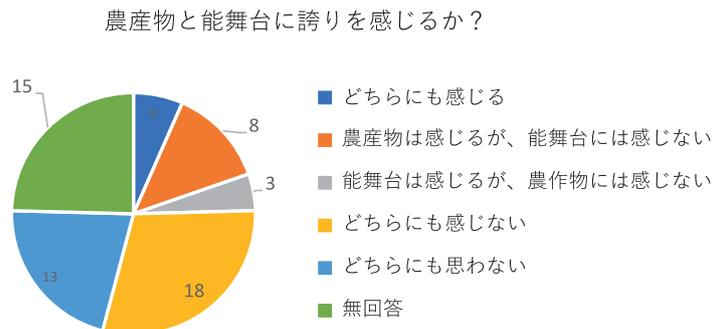


図6 農産物と能舞台への誇り

図6は農産物および能舞台に誇りを感じるか否かへの回答である。どちらとも誇りに感じると回答した世帯は全体の7%と少数であった。一方農産物だけに誇りを感じる世帯は14.5%、能舞台のみに誇りを感じる世帯は5.5%であり、両方を足し合わせたいずれかに誇りを感じる世帯は全体の20%であった。一方どちらにも誇りを感じない世帯は全体の1/3である33%、さらに「どちらとも思わない」と回答した無関心層は全体の24%、無回答は27%であった。この結果から、農産物あるいは能舞台のいずれか（両方も含む）に誇りを感じる世帯は全体の1/4であり、残る3/4

はどちらも誇りに感じない、あるいは無関心・無回答で $\frac{3}{4}$ となり、全体としては農産物あるいは能舞台に誇りを持っている世帯は少ない結果となった。

## 2-6 佐渡集落での演能が固有文化である認識

佐渡の演能は稲作に根ざした固有の文化と知っているか？

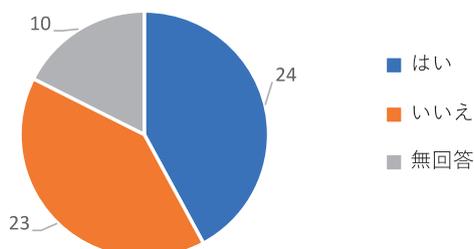


図7 佐渡演能に対する固有文化認識

図7は佐渡集落で歴史的に引き継がれてきた演能が稲作の収穫を村社に感謝する稲作年間行事に根ざした佐渡固有の文化であることへの認識結果である。演能を固有の農文化と認識している世帯は42%、認識していない世帯は40%とほぼ同等であった。昭和52年(1977)まで小泊白山神社能舞台では、毎年秋の稲刈り入れ後に村の重要な行事として薪能が開催されており、主たる出演者は小泊集落で能の研鑽をしていた住民でまかなえる程、能は村の大切な行事として受け継がれていた。しかし能楽を習う後継者不足から1977年を最後に、久しく村行事であった演能は途だえていた。能舞台を佐渡市有形文化財に登録し、村の有志の募金で2012年に朽ちていた茅葺き屋根を銅板葺きにして、同6月には羽茂地区の能愛好団体の全面支援による薪能が復活した。集落の伝統として演能は2019年まで欠かさず続いていたが、農業に根ざした固有文化であることを認識しているのは農作業の年中行事として受け入れてきた高齢者を中心とした世代に認識が大きいと考えられる。

すなわち若い世代には薪能の集落としての位置付けがあまり伝わっていないことが推測される。

## 2-7 能舞台継続への希望

集落の能舞台を継続させたいか？

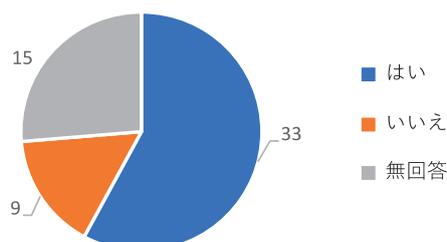


図8 能舞台継続への希望

集落の能舞台を未来に向けて村の遺産として継続することへの希望（図8）は58%の世帯が希望し、希望しない16%を大きく上まわった。このことは、前述の「演能が農行事に根ざした村の遺産である」という意識までではないにしても、ずっと昔から白山神社の付属の建物として村にとっては大切なものである意識が強いことがうかがえる。継続希望の理由の内訳として、大学や団体と協力して継続したい（4）、能舞台が集落にあるから（3）、貴重な建築物であるから（2）、集落活性化に利用できる（2）、イベントができるから、子供のころからの思いでをつなげるから、先祖から受け継いでいるものだからそれぞれ1世帯ずつであった。継続を希望しない理由としては、維持費がかかるが4世帯、人口が減少しているからが1世帯あった。

## 2-8 能芸能・農産物を島外に周知する希望

能芸能・農産物を島外にも知ってほしいか？

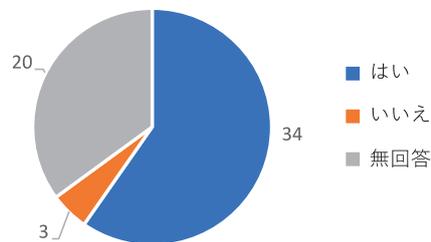


図9 能芸能・農産物を島外に周知する希望

佐渡・集落の能芸能や農産物を島外に周知する希望（図9）では全体の60%が希望する結果となった。一方希望しないのは5%とわずかであった。無回答は全体の35%と無視できない数値となった。知って欲しい自慢のものとして、海の幸（3）、山の幸、石工文化（小泊と近辺集落からかつて石臼が多く生産された）、須恵器（白山神社近辺は奈良時代の須恵器釜跡の史跡として指定されている）、砂浜、水田開拓時の溜池堀り、昔からの行事を続けているという意見であった。集落や地域で実施している活動としては、草刈りや水路維持、農地維持、道路維持（2）等の地域保全奉仕活動の他に、グランフェスタ、倉谷の大わらじ、小泊祭り等のイベント、詩吟、生花、バドミントン等の趣味活動もあげられた。

## 3 集落活性化調査（2020年）

2020年は新型コロナウイルス感染症対策のため、佐渡島全体で演能が中止されており、小泊の定例の薪能も中止された。例年演能と同期する映像コンテンツ作成と投影等で学生は関わってきたが、2020年は集落活性化に関するワークショップ開催に変更した。10月24日小泊での活動は以下のとおりである。

第一部：ディープラーニング画像処理ワークショップ

第二部：2019年能・能舞台および地域活性化に関する意識調査結果報告および地域課題ワークショップ・まとめ

参加者は小泊集落から5名、報道および集落活性化大学調査を支援するNPO代表の2名であっ

た。

### 3-1 ディープラーニング画像処理ワークショップ

ディープラーニングによる画像処理そのものは集落活性化調査と直接の関係はないが、ワークショップ参加者と同じ作業を進めることでお互いの意思疎通をはかるアイスブレイクの意味がある。さらに学生全員がすでに大学授業で体験済みであったことから準備の簡便さも考慮に入れ、実施した。

実施した画像処理はゴッホ絵画の「星月夜」のスタイルを参加者が撮影した風景写真に合成する処理である「スタイル変換」(図10)と、2016年当時高い精度で画像から物体識別を行う世界コンテスト優勝モデルのパラメータを用い、参加者が撮影した画像にそのパラメータを反映して逆方向の画像処理を行う「Deep Dream」(図11)の二つである。

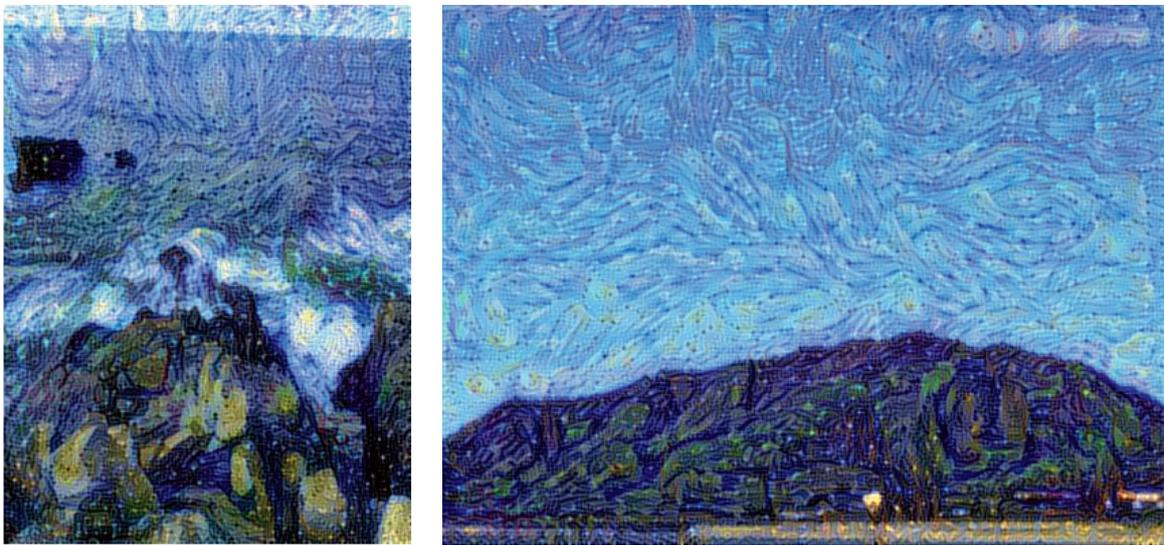


図10 「スタイル変換」で参加住民が作成した画像



図11 「Deep Dream」で参加住民が作成した画像

### 3-2 佐渡・小泊活性化ワークショップ

ワークショップでは学生と集落住民が佐渡や小泊の特産・特色をあげ、島外にどうすればひろめることができるかアイデアを話しあった(図12)。

まず初めの10分間、スライドを通して2019年のアンケート調査結果を紹介した。特に「今後、能舞台を存続させたいか」という住民意識の調査結果には参加住民の大きな関心が寄せられた。その後、2つのグループに分かれて地域の活動・佐渡の名産品・イベントに関する要望・島外に知ってほしいこと、この4つのテーマに沿って話し合いを行った。

1つ目のグループは、ゼミナール学生4名と、集落住民2名がグループとなった。地域の趣味活動として、「しの笛」があげられ参加住民の一人は実際に習っている。「しの笛」は学校での授業の一環としても取り入れられている。佐渡の名産品は竹細工やどべら(芋焼酎)、おけさ柿・ルレクチェなどの農産物、トキや佐渡金山・銀山など多くあげられた。イベントに関する要望としては、佐渡全体が広大な自然があることから、自然を活用したアクティビティがあると面白いという意見があった。例として魚釣り大会やキャンプ、海や川・山や森林を活用したイベント事を開催できればより地域が活性化されるという意見がでた。また、大小問わず佐渡には多くの祭りやイベントが行われている。アース・セレブレーションという外国人観光客に人気がある鼓童の祭りや小木祭り、能の披露などさまざまなイベントを行っている。

最後に島外に知ってほしいこととして、自然が豊かである意見が多かった。杉が多かったり、滝が多く流れていたり島ならではの魅力があった。他に、佐渡には高校が4つあること、佐渡自体に職場が少ないことがあげられた。自然が多いゆえに高校卒業したら島外に職場を求める人が大半であるという。

このグループのまとめとしては、佐渡にはまだまだ知らない地域だけのイベントが開催されていることがわかった。地域のイベントにせず、佐渡全体でPRすればより多くの観光客が来られ地域活性化にもつながるのではないかという意見があがった。

2つ目のグループは、ゼミナール学生5名、集落住民2名がグループとなった。地域活動として、草刈り(無農薬)や地域の祭り、宵の舞や鬼太鼓など地域ならではの活動があげられた。特に佐渡の自然を利用する、トライアスロンは全国に有名であるとの意見があった。実際に朝の道路でバイクで走っているアスリートを多く見かけた。佐渡の名産品では、寒ブリやカニ・お米や日本酒・佐渡チーズケーキなどの食が多くあげられた。赤玉石や佐渡金山銀山、トキといった佐渡の自然や文化を感じられる名産品も多数あげられた。

イベントに関する要望では、農業体験や海水浴を活かしたい意見が出たが、特に佐渡や新潟でサドフェスといった音楽イベントを要望する意見が得られた。佐渡は、海が綺麗で夕日や星空が映えるため夏フェスとして会場を提供すれば地域活性化につながるのではという意見があがった。最後に島外に知ってほしいことは、自然が豊かであるため棚田や天然杉、田んぼアートなどがあげられた。他にも佐渡牛や洋ナシなどの食、釣りが盛んに行われていること、店の会計時に島民割引があったり、映画が見られるカフェがあったり、自然だけでない魅力もあることがあげられた。

このグループのまとめとしては、名産品や普段の活動に魅力が多くあげられた。また具体的なイベントへの感想があげられ、食や芸能文化などを島外の人々にPRできれば、地域活性化へつながっていくと結論づけられた。

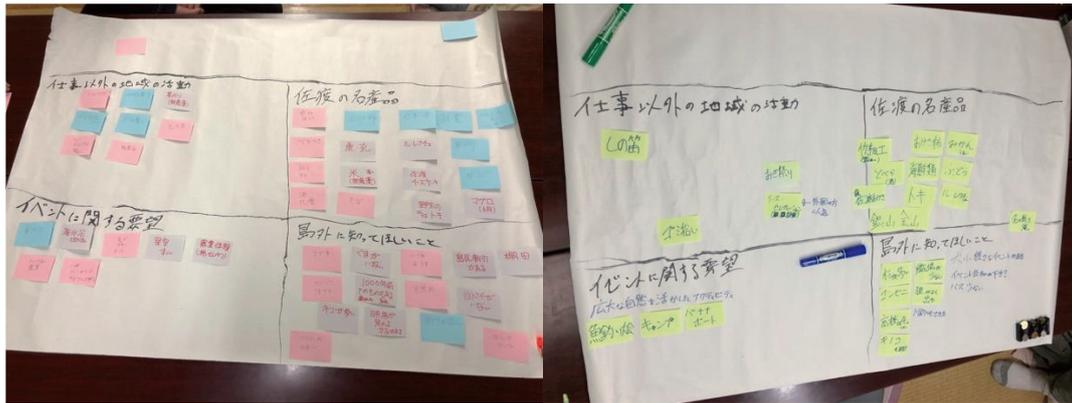


図 12 ワークショップ2グループが作成した集落活性化の素材

### 3-3 SNS による情報の拡散

本調査は佐渡市からの委託調査であり「情報拡散」という重要な目的も含まれる。活動の状況を SNS で共有することで、佐渡での活動や風物について多くの人にも知ってもらうことにより集落や佐渡の認知や知名度アップに貢献できる。また情報の拡散にはリアルタイム性も重要であるため殆どどの画像はスマートフォンおよび小型カメラによる画像・映像を撮影直後、Instagram 専用アカウントへのアップが行なわれた。アカウントは以下のとおりである。

Instagram 【nuis\_fujita\_seminar】 (図 13)

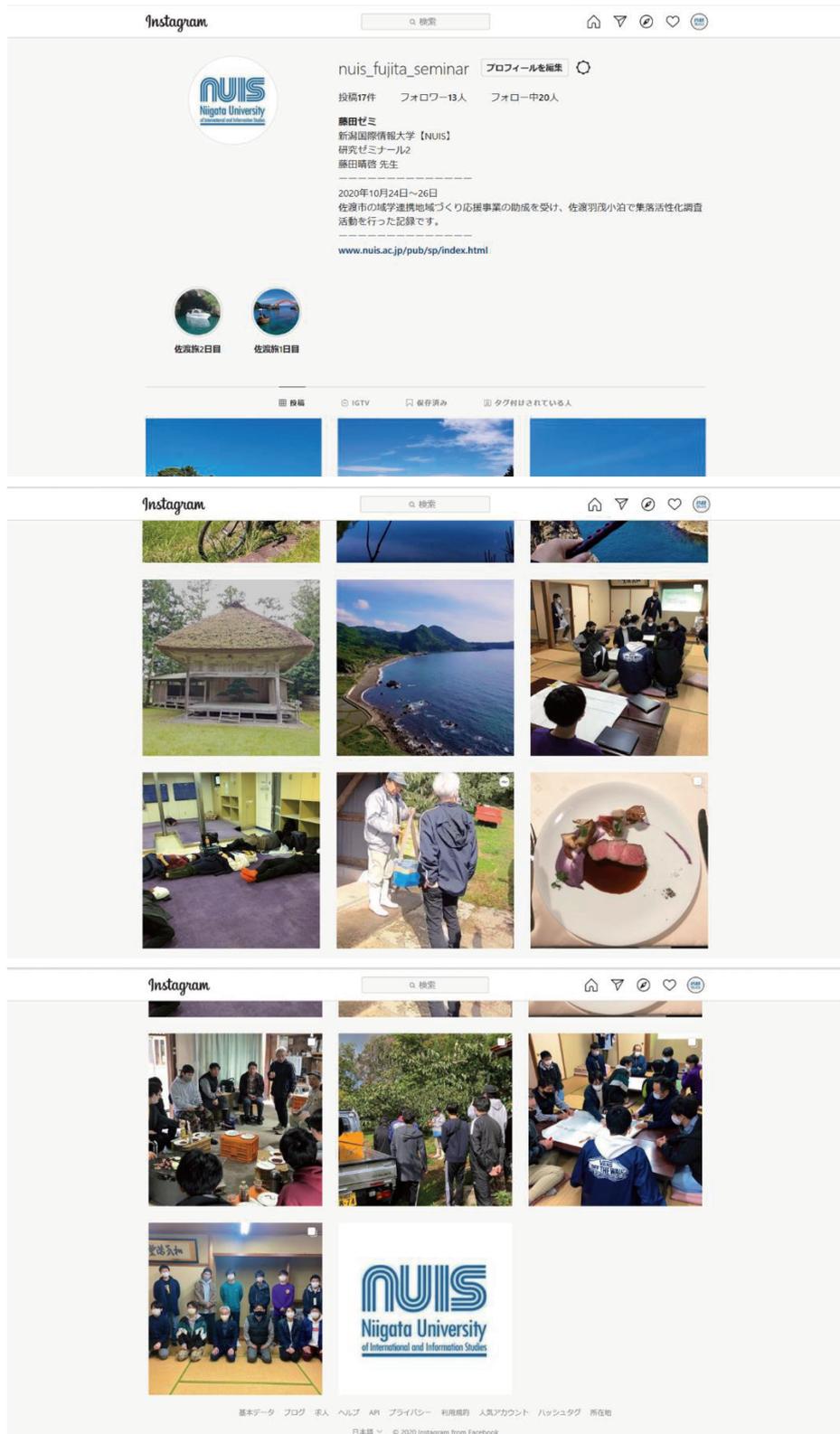


図13 Instagramによる情報の拡散

### 3-4 集落活性化調査研究（2020）のまとめ

10月25日にはおけさ柿農家における農作業体験と交流活動を行なった。

今回初めてワークショップを開催して、これまで2回実施したアンケート調査では住民の地域課題解決に向けたアイデアや意欲が十分に調査できないことが明らかとなった。一方今回の学生を交えたワークショップにてさまざまなアイデアや創意工夫が出されることが明白となった。今後は集落住民との地域課題ワークショップを2020年の内容を引き継ぐ形で継承する。

### 4 今後に向けた活動

毎年小泊集落にて調査を行なっているが、訪問滞在して住民と交流する学生は毎回世代が変わっていく。すなわち調査継続は新たな学年に毎年引き継がれる。2020年の2年次学生を対象とした体験型学習である「応用ゼミナール」にてこれまでの調査や事業を説明し、2021年に調査に参加するという想定のもとで調査計画を作成するグループワークを実施した。このグループワークで提案された調査内容は「島民が定住したくなる職と生活の条件・環境とは何か」ということ。これらを調査するには、現在島内に職を得て生活している若い世代を交え、広く意見交換を行い、何か共通の課題解決の糸口のようなものをつかむことがもとめられる。このグループワークに参加した2年次生5名を含む藤田晴啓ゼミナール学生11名の学生が2021年9月上旬に小泊に滞在してワークショップを開催する予定である。

### 謝辞

2012年から毎年欠かさず学生を中心とした交流を続けられたのも、地元羽茂小泊集落の役員、住民のみなさまの支援のおかげであることに感謝したい。

令和2年度域学連携地域づくり応援事業による集落活性化調査研究委託による佐渡市からの助成をいただいた。学生の旅費・宿泊費・交通費が支出でき負担軽減につながったことに深く感謝する。